

# 心理動詞構文における名詞格の研究

## —ES型の与格構文を中心とした名詞格に焦点をあてて—

金 眞伊

### 1. はじめに

#### 1.1 研究目的

日韓の心理活動を表す動詞の体系<sup>1</sup>は人の心理的動き、状態の変化、テンス・アスペクトの存在、格支配等の文法的・意味的な性質を有するという点で類似している(金 2005)。また、それぞれの構文が、何らかの感情を抱く人(経験主/Nハ(ガ)(NP1))とその感情を引き起こす理由(対象/Nヲ・Nニ(NP2))等の項(NP)を構成要素として持つ(三原 2000)という点から、日韓の心理動詞構文はその意味構造的にも殆ど同様の仕組みで成されていると考えられる。

ところが、両言語の心理動詞構文が統語的・意味的に非常に類似しているにも関わらず、日本語の心理自動詞構文と韓国語構文との対照になると、心理動詞が支配する名詞格のタイプに相互異なった形の対応が現われ、文型的な相違が見られる。

- a. 花子がそのアイドルに憧れる。 ⇒ 与格構文  
 a-1. (花子가 그 아이들을을) 동경한다.) ⇒ 対格構文  
 b. 私はこの頃、お金に窮している。 ⇒ 与格構文  
 b-1. (lit. 나는 요즘 돈이(이) 궁하고 있다.) ⇒ 形容詞の二重主語構文

上記の a (a-1)、b (b-1) 文の点線は経験主、実線は動詞の動作の対象、二重線は心理活動を表す動詞を示し、日韓両構文とも同様の意味構造を持っている。ところが、a、b の日本語構文が<与格構文>を成しているのに対し、対応関係にあるそれぞれの韓国語構文は、a-1 は<対格構文>、b-1 は<形容詞の二重主語構文>の形態で現われ、日本語とは統語的構造が異なっていることが分かる。

本稿は、日本語を基準言語とし、ES型心理動詞<sup>2</sup>の与格構文「Nハ(ガ)+Nニ+V」が、対照言語

である韓国語ではどのような構文構造で現れるのかを考察し、その結果から、両言語の心理動詞構造の文型的な相違を明らかにすることを目的とする。

#### 1.2 先行研究

Bando (1998) は、与格心理動詞構文の NP2 の意味役割を「感情の対象(target of emotion)」や「原因(causer)」両方の意味役割を有するもの、「感情の対象」、「原因」それぞれの意味役割のみを有するものの3つのタイプに分けて説明し、特に「原因(causer)」のみの意味を持つ「Nニ」は「Nデ」と交替でき、対格との交替は不可能であるとしている。

また、杉岡(1992)は、非対格心理動詞はその語彙・文法的な特性上、受動構文の形では現れず、対格とは共起できないと述べ、Bando(1998)と同様の見解を示している。

一方、佐藤(1997)は、受動構文化できる与格構文に現われる二格名詞句は「感情の対象」という意味役割を、受動構文化できない与格構文に現われる二格名詞句は「原因」という意味役割を担っていると述べ、NP2の意味的な特性の根拠を動詞の文法的な側面から解明しようとしている。

### 2 考察観点と研究方法

#### 2.1 考察観点

人間の感情的・心理的状态の変化やそのような心理の様子(態度)を表す動詞群のことを「心理動詞」と称することにする。その構文は、感情の持ち主である人(経験主)と、その感情を引き起こす原因(対象)になる成分を含む特徴を持つ。心理動詞を意味的な観点で分類すると、大体、感情(情意)的、態度的、思考的、知覚・感覚的心理動詞の4つのタイプ(吉永 1998; 山岡 1999)に分けることができる。

本稿では、動詞が指定する名詞格との結合関係に注目し、特に感情・態度的な意味合いを持つ心理動

詞構文に分析対象を絞り、構文・意味論的な観点で考察を行う。

## 2.2 研究方法

基準言語である日本語の ES 型の心理自動詞（感情・態度的）構文「N ガ/ハ+N ニ+V」構造に当てはまる用例を、文学作品（日韓対訳本も含めて）、新聞資料、辞書等の地の文から抽出し、対照言語である韓国語構文と対照させ、両言語の名詞格の対応様相を分析した。

## 3. 考察

本稿の分析の手順としては、第2章で定められた心理動詞を分析対象とし、それぞれの語彙の意味に基づき、＜感情的心理動詞＞、＜態度的心理動詞＞の大きく二つのカテゴリーに分けて分析を行う。両項目の低位分類にあたっては、まず、基準言語である日本語の心理動詞文が取る文型を、主に与格構文を中心に抽出し、その文型レベルで文の構造と語の意味との関係を考察する。日本語の心理動詞文に対し、韓国語訳はどのような様相で現われるのかを、またも文型・語彙の意味を中心として探る。

本稿では、地面関係上、日韓の対立が特に目立っていた文型例の一部のみを浮き彫りにして分析を行う。

### 3.1 「N ガ/ハ+N ニ+V」⇔「N 가/는+ N · / · · +V」

- 1.これを見れば、自民党執行部が伊東氏にこだわった事情がよく分かる。  
(이것을 보면, 자민당 집행부가(ka) 伊東씨에게(ege) 집착한 사정을 잘 알 수 있다.)
- 2.ジーコ前監督は基本的に目前の勝利にこだわる。  
(지코 전감독은 기본적으로 목전의 승리에 집착한다.) (読売新聞)

上記した例の心理動詞「こだわる」等は構文の中でその動詞の語彙的な意味（心理状態や態度的な動作）が向けられる「感情の対象」を必要とする。日本語の「N ニ」に対応する韓国語の場合、「N 에(ey)」以外にも「N 에게(ege)」の形が併に現れており、形態的に異なった「感情の対象」を表している。要するに、NP2 が動詞の「感情の対象」になる場合、名詞句の名づける意味が「抽象物」であれば 日本語の「N ニ」に対して 韓国語は

「N 에(ey)」が、「人」の場合は「N 에게(ege)」が対応関係を成す。

### 3.2 「N ガ/ハ+N ニ+V」⇔「N · / · (ka/nun) + N 을/ · (ul/lul) +V」

- 3.センター活動も含め、留学生のほうが、よほど土に親しんでいる。  
(센터활동도 포함하여, 유학생 쪽이(i) 훨씬 흙을(ul) 가까이 하고 있다.)
- 4.자연을(ul) 가까이하다.  
(自然에親しむ。)
- 5.子犬は、親身になって世話をしてくれる少年によくなつた。  
(새끼 강아지는(nun) 애정을 가지고 돌봐주는 소년(ul) 잘 따랐다.)
- 6.계모를(lul) 따르게 되었다.  
(義母になつくようになった。)

上記の動詞「親しむ」「なつく」等は動詞の心理的な状態、又は動作（態度）が向かっていく直接的な受け手を必要とする心理動詞グループであり、NP2 との結びつき関係からは特に「感情の対象」の意味を生み出す構文である。例文3～6のNP2は全て「人」や「もの」を表す具体名詞が「二格」とくっ付いた形を取っており、「対象」の意味を持ちながらも対象格の「N ヲ」には置換できない。つまり、上記の構文での「N ニ」は「感情の対象」のみの意味を表す名詞句である。

日本語の心理動詞が、その対象としての NP2 として「N ニ」のみの形を求めているに対し、韓国語の心理動詞は対格名詞句の「N · (lul) = N ヲ」のみを求めていることが分かる。

### 3.3 「N ガ/ハ+N ニ+V」⇔「N 가/ · (ka/nun) + N 이/ · (i/ka) +A」

- 7.童顔のせいか独身とみられがちな私は答えに窮する。  
(동안 탓인지 독신으로 보여지기 쉬운 나는(nun) 답이(i) 궁했다.)
- 8.戦争末期には労働力の補給源に窮し、中等学校以上の授業を停止して学徒を勤労働員し～  
(전쟁말기에는 노동력의 보급원이(i) 궁해서, 중등학교 이상의 수업을 정지하고 학도를 근로동원하여~)
- 9.애깃거리가(ka) 궁한지, 그는 같은 말을 계속하고 있다.

(言い草に窮したのか、彼は何度も同じことを言っている。)

心理動詞「窮する」は人間特有の心理活動を表す行為であるため、その経験主になる NP1 として必ず「人名詞」を要求する。上記の例 7~9 における韓国語訳は日本語の動詞「窮する」に対し、それぞれ形容詞の「궁하다(kwung-hata)=窮する」が対応している。「궁하다(kwung-hata)」は名詞「궁=(kwung)窮」と動詞「하다(hata)=する」の合成の形からなっている形容詞で、日本語の場合においては動詞に当てはまる例である。

### 3.4 「N ガ/ハ+N ニ/デ+V」⇔「N 가/는(ka/nun)+N?에/로/를(e/lo/lul)+V」

7.3 万人の生存者のうち 2 万 7000 人が帰国したが、ほとんどが後遺症に/で苦しんでいるとされている。

(3 만명의 생존자 중 2 만 7000 명이 귀국했는데, 거의가(ka) (후유증?에/을/으로(ey/ul/lo) 괴로워하고 있다고 보고 있다.)

8. 戦時中のレイテ島でも多くの人々が日虫病に/で苦しんでいたことを突き止めた。

(전시의 레이테섬에도 많은 사람들이(i) 일충병?에/을/으로(ey/ul/ulo) 괴로워하고 있었던 것을 밝혀냈다.)

9. 日本にいるインドシナ難民の多くが、語学教育の不足や、男女比のアンバランスに悩んでいる。

(일본에 있는 인도차이나 난민의 대부분이 어학교육부족이나 남녀비율의 언바란스?에/로/를(ey/ul/ulo)고민하고 있다.)

10. ちょうどそのころ、やはり女の子のことで悩んでいた先輩から電話がかかかってきた。

(딱 그 무렵, 역시 여자문제?에/로/를(ey/ul/ulo)고민하고 있던 선배로부터 전화가 걸려왔다.)

11. 자금 부족?에/을/으로 고민하는 남편을

보면서도 그녀는 자신이 어떻게 해야 할 줄을 몰랐다.

(資金不足に/で/\*を悩んでいる夫のことを気の毒に思いながらも、彼女は自分が何をすればいいのか全く分からなかった。)

上記の例は、日本語の心理動詞の与格構文「N

ガ/ハ+N ニ/デ+V」に対し、韓国語の心理動詞構文「N 가/는(ka/nun)+N?에/로/를(ey/lo/lul)+A/V」が対応関係を成す例である。

動詞「苦しむ」「悩む」等は、その対象語である NP1 と NP2 を支配している。例文 7~11 の NP2 の「後遺症に/で」「日虫病に/で」と動詞「苦しむ」の間には「原因」の名づけ的な意味が内在しているが<sup>4</sup>、このことは、NP2 として「N ニ」以外にも原因格の「N デ」が置き換えられることを想定してくれる。

一方、韓国語訳は日本語の NP2 に対して「感情の対象」を表す「N 에/를(ey/lul)=N ニ/ヲ」が「原因」の意味を持つ「N 로(lo)=N デ」に交替できる。したがって、NP2 と動詞「괴로워하다(苦しむ)」「悩む(고민하다)」の間には「原因」と共に「感情の対象」の意味が混在することになる。

承前は、日本語の「原因」の意味を持つ心理動詞構文(上記では N ニが N デに置換できるもの)が対格名詞句の「N ヲ」を取らない(Bando 1998: 31 図表) こととは異なる事実である。

## 4. まとめ

1. 日本語の心理動詞構文は、一般的な動詞構文の体系と同様、動詞が構文全体の中心語になり、名詞格も主に動詞の意味特性によって決まるが、韓国語の名詞格は名詞と動詞両方に影響される特性がある。

2. 派生動詞が中心となる日本語の心理自動詞構文は、韓国語の心理形容詞構文と対応関係を成す。

3. 動詞との結合関係から、NP2 が「原因」のみの意味を持つ「N ニ」は、付加詞「N デ」と交替でき、「N ヲ」との同時出現は不可能である(心理自動詞の非対格性)(Bando 1998)が、韓国語は NP2 の意味役割が「原因」の場合にも対格との交替の現象が現われる特徴がある。

## 注

1. 以下、「心理動詞」と称することにする。
2. 心理動詞構文に EO、ES 型の二区分があることはよく知られている事実である。前者の EO (experiencer-object) 型は、経験者が目的語となる類型であり、後者の ES (experiencer-subject) 型は経験者が主語に立つ類型である。例えば、「雷がこの子を怖がらせる」は EO 型で、「この子が雷を怖がる」は ES 型である。
3. NP2 は、「N 에(ey)」そのままの形ではなく、必ず「N 때문에(tteymwuney)」<sup>19</sup>のような「原因」を表す形

- 式名詞との結合の形で現れる。  
 4. NP2の原因性は複合格助詞「～ノセイデ」「～ノタメニ」との置換が可能であることから言える。

**参考文献**

言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』 むぎ書房  
 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』 むぎ書房  
 高橋太郎 (2005) 『日本語の文法』 ひつじ書房  
 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』 明治書院  
 石綿敏雄 (1999) 『現代言語理論と格』 ひつじ書房  
 山川 太 (2004) 「日本語における心理動詞の格標示について」 『日本語・日本文化』 30, pp. 1~20 大阪外国語大学留学生日本語教育センター編  
 佐藤馨子 (1997) 「二格名詞句をとる心理動詞」、『横浜市立大学論叢』 48, pp.117~138 横浜市立大学学術研究会編  
 Bando, M (1998) “Semantic Structures of Psychological Predicates : With Special Reference to Japanese Psychological Verbs”, Doctoral dissertation, University of Osaka.  
 杉岡洋子 (1992) 「心理述語についての考察」 『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』 第 24 号, pp.361~373  
 金 眞伊 (2005) 「心理動詞構文における名詞格の研究 - 日韓対照を通じた日本語の与格構文について -」 『対照言語学研究』 第 15 号, 2005 pp.83~102 海山文化研究所  
 김용하 (1996) 「韓国語 心理動詞의 項構造와 接主語」

『語文学』 第 57 号, pp.73~107  
 김홍수 (1988) 「現代 心理動詞 構文에 관한 研究」 서울대학교 대학원 博士学位論文  
 남기심 (1993) 『国語助詞의 用法』 박이정  
 国立国語研究院編 (1997) 『標準国語大辞典』 国立国語研究院  
 Lee Chung-min (1976) “Cases for Psychological Verbs in Korean”, 『言語』 Vol. 1-1 pp.256~297

< 用例引用資料 >

新潮 100 冊 CD-ROM (収録作品の一部) 新潮文庫  
 日本語動詞の結合価 CD-ROM 三省堂 (本文中、出典が表記されていない用例は全てこの CD-ROM 資料から)  
 読売新聞 (オンライン情報)  
 朝鮮日報 (オンラインデータ)

< 辞書類 >

『広辞苑』、岩波書店。  
 『現代新国語辞典』三省堂。  
 『大辞林 (第二版)』三省堂。  
 『標準国語大辞典』国立国語研究院  
 『동아새 국어辞典』 동아출판사  
 『동아 prime 일어사전』 동아출판사  
 『옛센스韓日辞典』民衆書林  
 『新日韓辞典』民衆書林

きむ じんい／お茶の水女子大学大学院 応用日本言語論講座  
 puffintea@yahoo.co.jp